

ポスター14

ポスター発表(研究)

日本語支援員の自己エスノグラフィーにみるビリーフの変容

新谷 遥(京都外国語大学大学院博士前期課程)

研究の目的

発表者は、大学の日本語教育専攻を卒業し、社会人経験を経たあと小学校教員免許を取得し、現在、公立小学校の日本語支援員(以下、支援員)として児童の支援を行っている。本研究では、発表者自身の過去の記録を用いた実践の振り返りのプロセスを示し、日本語指導に関するビリーフの変容を考察することを目的とする。

研究の価値・意義

日本語指導が必要な児童生徒に関わる現職教員のビリーフの変容と教師の成長に関する先行研究には浜田・齋藤(2018)があり、経験がビリーフに与える影響と振り返りの重要性について述べている。一方で筆者が実践を行っている奈良県では、支援員の研修の機会の少なさが指摘されてきた。自身の過去の記録が振り返りに有用であると示すことは、研修の機会が少ない支援員にとって、よりよい実践を目指すための一助になると考えた。

研究方法

発表者自身の過去約15年分の日本語指導に関する記録やレポートなどを資料とし、「自己エスノグラフィー」を作成して、経験ごとのビリーフの変容を振り返る。また、多様な関係者への聞き取り調査から作成された日本語教育学会(2019)の資質・能力モデルからマトリックスを作成し、自己エスノグラフィーの各段階と対応させ、求められる資質・能力の1から5の自己評価を行った。

結果と考察

過去の自身の記録から自己エスノグラフィーを作成することで、自身のビリーフの変容が明らかになり、目指してきた実践とその要因となる経験、そして今後目指すべき実践を振り返ることができた。さらに、求められる資質・能力の自己評価から、自身に必要な知識を把握することができた。またこれらのことから、研修機会が少ない支援員がよりよい実践を目指すために、自身の記録を活用できることが示唆された。

【引用文献】

- 日本語教育学会(2019)「文部科学省委託『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業』2019年7月改訂版資質・能力モデル」<https://mo-mo-pro.com/report> (2019年7月27日閲覧)
- 浜田麻里・齋藤ひろみ(2018)「日本語指導が必要な子どもに関する現職教員のビリーフ—影響を与える経験に着目して—」『子どもの日本語教育研究』1, 61-75.